天正記

天正記　豊臣九代記録

一　明元日向守方上洛する

一　業田三郎左衛門へ人数相加へんれ事

一　小田原へ信長発向する

一　関東武蔵りそつ方へ[illegible]つかはのる

一　[illegible]秀吉へ[illegible]れ入る

一　[illegible]信長へ知行宛りれる

一　慶長元年　朝鮮國へ[illegible]らい船渡事

同三庚子二月十五日信長死去のる

菅原家蔵書
野坂文庫蔵書
野坂文庫蔵書
東京帝国大学図書館蔵

祈明知日向守光秀が力なる織信長公一万人の大
将ゝをもはれいとゝろいくばくもなく清明忠
をはされすゝ小天下の望をはれさんとかねすゝる
代官治文子治一ゝくきえゝゝ紙なゝへ下
京中のふるゝをいて六月二日より始なく討なる
をはれ大かう秀吉中國より備中高松城城水
せめゝゝ治ゝをられいとゝろよりゝ吉川小又治
ゝて十ケ國はもうゝ一統出治勢併なゝゝ小
はすちうたんこれかゝりゝゝ天下ゝ一めす
事かきりなゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝ後軍乃やうかゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ治れゝへ水をめゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

さく日まてのはらん廻又十五面きはくひく小そ
はらうのはの今日をりのうちと法ひやうらやうれ
される四のうれるはしうと法るたうしはるる又
はうるを覆人まて御料きはけをたされ家まてきやう
かはのさこ俳をの家乃所へはりのさはく
あ河の一はうる城て流ふきをうる松をもくう
まそなる　と法ゑい方なりさるはくみたうを
法如ちを歩ゐ中やうをりあまうをりてさふ
ひくもせんはくみえや乃のひさ服をはくまうる
つしうれ外法寿をれすはけはやうふとなけふや中
法国ひはやうはやりうたふうをけりまうを出る
法乃長た法門しせひはうこ

走りはめ不法たりまつる法しをま
さをもなくてをみはりはく
やうをてをこう長を法門あふくきやうたはけ
を仕れあうの太馬駅てはれりくもりなふを法無
小甲法るはりまを来逆さをりんのせう城中の
りひこうをあのうはいはをうはくの乃ゆへあれ
も女人はをををのうへをう家をを法國又う
ふくをうはをを長をうん俳段中を上をは和りん
はうれは和乃ををうはるを和をはひりはるす
うれををはをうはるを合我のようをて一ま
うはか和る日をは法六月十三日山をれるはうを是
法系俳なり中明和日向守光秀橋津國おもてを

んの一人数をつれいたりんの乃あるへ人数所ゝより
こゝにひきりうくをあひひくゝ一あまた討をとれ
うをつハせうつをうるれたゝ乃へいつを則とを後うを
られみられ時ゝ後城あけくもゝうけ打ちあゝを
おひきりうれやしやういなりをすちてしまうを
ひすゆ敵乃まきされふ見れ今ち四の中を時ゝひ
さうりゝの兵城ひゝうゆまきの乃ゝれを多へこ
山ゝれを代百姓ゝも家人こ見をゝひゝうゝ
うりやゝしい
ゝをつおゝたの十二日ゆふ垂下りあひをて入
まれた将りゝりゝりられゝれいゝとう四郎佐
いけゝをうゝ出きやう部を車ゝひのゝれ四ゝ

四知のゝひと旅りゝの世女人一ゝよゝゝこは
ふゝりゝゝゆをゝりけをゝれをゝゝれ聖りゝ一
ゆんゝゆあんつをうゆりて信ゝ公中ゆ後ゝ又ゝゝ
ゝゝゝひとゆゝしめをまゝの清をゝりなゝ
をゝゝいりゝゝゝゝりゝゝ乃ゝりゝゝゝけゝの
ゆりゝゝ天ゝりゝゝゝゝゝゝゝ
一業四しのゝのゝの勝家　信ち代四そハ戎
四んのゝゝをゝくゝきなゝ越前へ信長なゝゝ
ゝゝれへとゝ乃を清しゝんこゝを時ゝゝれゝは一
四ゝまゝんゝゝゝ世ゝられ業四りゝ大國をゝつ
ゝ垂ゝゝゝのゝひゝゝゝゝゝゝゝゝけゝ清
ゝゝゝひ合戦りゝひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

秀吉約諾なりはたいちんれさいくはのさしけ
ぎふとたつやをゆ事いしやう俄よりもんん
をはのうつさん祁戸三七をとのひうさうひ天下へ
きりてのりはは如之はのうけくん山を角をれ故
城のうしてとろかく処より結やか袈裟前くれ
三の國の人数うち立てを美られ寄たい時秀吉
はうしろまたとてしつかよりけひうひて
とりのひ一うつせん城とけ人数のまうのうを
たをたを軍をを志ちせん兵城ホ人ちやうう
いさまてふけ入をつうけれはとまさのは
のはひはくくを見をとひ一つちんはい三十餘人服
をきりてん三のは史をけやを見ををい

天正十六年正月廿六日

祁戸三七屋敷へのるいのひさ法上洛なされ大
かうひてのうこうへ伊かけ三ゆ月をとれ礼
おも作られんを上のうくをんの祖父ひくなと
るさかくををたをふふををふををたををくの
りくらさのるふよりてこやうをよをそひさ世下
ふおをを作をを天をちなり
一和宗左宗左支うをまさ事を年ををあく
をふをやうを発作はまくふ相をたうさう
をんをををまれくんをんはをちをたひりのい
中はこうをとはいくをも　大りひくうを法
をひをおりりりてをやらくいくを系角松子

廻さと殺こうしひれ危迫のこやうけんいの
集人れすけ汰るつて形風ぜゆくめらゆくやいへ
こもふ加ゆ一ばく汰れ京りよくめからひを活
くこん産きけ世活付ら形てすの乃越清らやうの地
如糸ねこうこれ中やう関東一のえこそ据
ゆふこうこいけかまへ色ふりさやうせいなん
百れ形ひふやいふせゆいこん色さうひこてて
生洋こへこれまりけしもま家乃軍兵こを下枝
洗こ洋こうこそこうふ事ゆさてこそれぬ水こる
ひこ汰こうやそわいくれ万ひくんせいよあひ
りりひてう又もやそせこん色いこるこれこく
ゆこうこそ日数汰をこうこ活世会こおやし

りさきこうく年三月一日より　大ひうひてより
こう清くこん産ちこ活くしこんせい小國重
方ひ汰人三西ゆ五そせこん洋これふこい係こへ
色ちこんを保勢やこん列むひこさこすきゆる石
ひやうこ西ひこや京地こ迎こさ活色
三月廿九日より秀吉こ孫山へ活人三西
こうひきこれうけまけて活こうこ中ひこ
源兵衛ほらこい洗ひこれたひきここれこんを中
納言秀次ひ汰人しひとつと山中れ城跡へこひ
入活これをあこそへこを一柳ひの寺討死こうは
かけりこくくあいやこくこを引こうし一こく
ふせあこんすこふけりこ入城ぬし松田右兵衛

るうや君前をはゝめとして家元れ信数多うち
ちうの式かい流やめうす　大納言家康ゝ出
せんちうなされ　小系うゝら小田原と押詰め
れされ海ゝてを九鬼大王するか方たる奴大ねとし
てのしゝ海ゝる海いゝ海伊勢海ゝのうゝ君大船
をもつてをゝ法をうゝをうゝ島ノ内ひもも
なくゝやうゝくかうゝつ先ゝ来石ゝを山と法大
将ノ法ようのいらやうゝ物ゝをゝをみうゝかくゝう
ちうゝれかうか作法をうゝ状くゝ小系ゝ城内法国ノ
をゝくゝ法ゝを広ゝれゝうてう義法をはゝたろ
ゝくゝ先いを是ゝ記ゝめゝ状ゝれゝるゝくゝる美ゝを
うくゝしゝめいゝくゝてゝたいちやう伝れのゝ

言上ゝをゝ法ゝとゝゝ先ゝ法せうゝりゝこれゝりゝさゆを
ちうゝをゝてゝうゝてうゝはゝをゝ法のゝまゝるゝのゝひゝ法
幸法たをゝはいやうゝかゝゝ上　七月十三日やう
てうゝいつれゝを松田尾張ちうゝをゝ新参家大名
るゝのゝをゝをゝ先ゝゝ長下のゝをゝ服
をゝさゝ世ゝられれゝりゝめゝすゝまゝく法ゝ長ゝしゝをゝれ
いてうゝゝをゝみゝちうゝをゝれゝふゝひゝるゝやゝりゝへゝを其
法とゝれゝもゝすゝ正利をゝをゝひゝくゝれゝゆゝをゝてゝんゝのゝやう
ふゝつゝをゝてゝく無ゝ下ゝうゝれゝわゝつゝれゝ義ゝてゝんゝたゝうゝれゝう
法ゝりゝふゝう

大ゝりゝ秀ゝちゝうゝれゝちゝりゝひゝとゝりゝつゝか　毒ゝう
八王ちゝ数ゝ百ゝれゝ城ゝふゝくゝとゝせゝめゝおゝをゝしゝあゝうゝと

きりすてのひいくろ治うて治くうん産　波野たうん
ふやう石四治アハお猟　大谷きやうゆあの流
大ゆうて三ゆうゆうけて奥州ゆう秋日のなきて
治うゆうきうれゆ上國く治はけんし作治きられ先い
代れ次第ロ一ユ及りす作　治ふれりより
一　あう州乃うち金津へ治ゆいそ十七郡白河れ城
郡山れ関羽禁忠三赤下されく　ゆきまのたろ
四九　一　おそゆ一國　中納言ね
一　三河國　愚りきえ万石　四中兵ア
同　吉四二十万石　池四三左衛門
一　遠江國　濱松十万石　塚尾たてりれ
同ゆう川ゆ万石　山内おるる

同　ゆきすう三万石　波瀬小四永
一　すうう一ゆ　中村式部
一　信州　佐くいれ郡六万石　子石檀長束
同小うさけうん　石川出雲ゆ
同伊ゆ郡七万石　羽禁河四ゆ
同本番ゆ　治義入るり
同ゆう郡　ひれの職ア
関東はりひゆそしてむう忠やい
大納言家康ゆ出ゆ治ゆ中れされく
さるはく小武蔵りて治きうてゆうゆ上しゆは
らんゆうて　ゆ長ひう秀吉ゆう歯屋ゆあう
はゆる

なん井沢をゝかの巻さまや波すゝん

発のさの国さすがる部語

とゆさり〳〵清いそゝかれされくほとゝう

九月一日城郡こゆらくるゆるいちんハよーう万

せいちん重〳〵

さる程うたいかうひくゝのー出張出世ゝてまり

うの吹くゝ日本國しよ金銀の出山いく巻を上おう

らいまうきう面ちんのつう産さんーうさんらん

こゝをのいさこうるとゝゆゝきのうとてん

ちくれ公物我もくゝやりち業れうれ教そそなへ

をふ漆うたゝのし山張ひむしよ俗たり山ーハ

美食をまれるもをうゝゆゝるすゝあれなゝよ今時

をいうなるちん姫やゝ人ういるゝまて金銀たゝく

さんふりちあんゝさゝいふすなりかん物

ふふうゝてはさきゝる事を大かう秀をこう

四巻題もつはゝよ清さいゆへ波とう乃こ川ーゝ

ひ人一人をこれなふふゝあく波もつて天乃善恵

をゝ〳〵をいくゝうのうゝゝ弁清代るり

巻去元年九月八日乃ゝくやゝ国をゝの山ちそ我

国を城去京れゝりた孫ゝれのふりとうたゝゝも波

うゝゝのみふゝとゝ年八年もまうなるすを

れひたゝゝ大船ゝるを天ゝゝを波乃ゝの枝ふよ

家うゝわひたつゝなんゝんゝゝの姫を

ゝんやいふくふへうふ乃なり風うやくゝされ

うらとかをとをとをさたう海水へよりさして
みるなかはゆくなり又水ふかくなりてふれこもらや
まんをきをさるよりはしりのいきのこれ三百緒
人これありふねのなりうそ三十又ろうちれいつを
さこあなのひろさ三てうしかやかれはらとは
をりうなりかんはらを風うりうふふまりて
きりやうそらの坂とさをのひうあまれなり
たれもひきをそうをの方へらうたんを中地か
えれをうのさすうれた太刀射をもつて云上り
わくなの絶なすすかはうこひすり
一いかさるしやうう一ひかか　無をやりうの八
さる第二人りあ三りるりいかさるさる七りを

つうをうくをもやくろうして尾をなうく孫すを
のかれをうをのふひとりうをうりうふ聖牛
ふこれうり上このをのをを垂やうふ万たんもりん
二十六まんたんをんらうんをんををいとまをさをの
文をうを　くうきあるを酒をりりうさ中くを
ふをひうをまうをふ自洲をやろうをはりや
うをたを来つ射洲洲りのひうをて行こされのひ
うをたあハをりの丹百緒をうはをさく大坂へりか
つをうをふねの洲ををををよう七十まん石のはをり
をり今をの洲をりひうをして食ふふを牧長をうを
ふらをされりた右来門の射しんうを仕ひをを
上ををて張ふ百まいををされ梅袁ひいをふをを

たいふ法師面家さうひの町人ホ也をれくるり
ゝさけ酒、す永沢寺なり山野ふたゝまれ出
ひとあるゝへそこゝふもゝをゝるゝ事ゝく福
徳天ゝありとゝは我や法免いよ前代みりんの事
一　寛也三年三月十又四日也ものす
日きり法ゝくゝれ名ゝ所ゝのうなのなゝさるやう
たゝまりゝの花見と中ゝ上のたいこもゝとゝの
多ゝゝのゝひさゝ在ゝむゝく山ゝすゝ水三所
伊勢ゝあゝ弘天中かゝゝゝゝゆゝてつゝうれ
四月をゝしくの海くゝをうゝまりゝゝゝ足もゝと
ゝたいこゝゝ山ゝ性京法馬ゝまゝれけいゝるり
廻りゝゝへゝゝをゝりゝいくゝもこれゝゝ法ゝの

うゝひゝゝを殺ゝ法ゝくゝゝんゝの事ゝゝは
ゝひさゝそゝうゝへゝゝゝ所へは年形人ゝゝゝゝ
た右来ゝ射ゝゝ殺せ法ゝゝられ浄かゝゝゝ人ゝ月ゝゝ
ゝゝを山中山ゝゝのゝゝゝゝ中ゝ弘武ゝれゝゝ人を
とゝは是ゝゝを殺ゝゝへゝゝ一ゝゝい法勇の人ゝゝ所を出
入ゝゝゝ
大ゝゝひゝゝゝ又一ゝゝ西ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝめゝて殺ゝ法ゝゝ色ゝゝんゝゝ
ゝゝゝも殺ゝ花ゝゝゝゝゝ山
りゝゝゝきゝゝゝゝ人
ゝゆゝ山ゝ殺日ゝゝゝりゝゝゝれゝゝ法
ゝまゝ法ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

二ゝ西

万代とうやみ作ふの山桜
松ゝ小まつのえとう色作く
せがやうま作所
作者 代沢貴

一番　設所さ海　作者あ〆そへ　小出けつまま
二番　西のまれさ海　四中一長ア
三番　松れまれ換　木下すさふ
四番　三代まふさ海　石田もくのうま
五番　作者やく人　ひくさり弟子
六ちん　大納言屋作角　右田又左衛門
番付大ゑ左角作者の作
大ひうひくゝりこうされ色作なりそこ三ゝう洗

小作度作とすく発られ作者ゝう色の侍
左角作門まてゝ者ゝ者ゝとこいせんうすへとゝ
これちまふくゝ色中さくゝなり三ゝう
のんまて作うへくさ海へ作せんを城善洗作
西ゝを作られ　ゝうゝ海　中品左角　以下
中ちやうゝ海のちんしの又大義成出まひゝ
て作ちまゝいられを三作ほう作てそのくゝ色
くさま作ちやうゝくゝ家をせんせゝるゝと
わゝゝゝ思ひくゝれたくゝ見ゝひゝくゝれゝ
ふさゝ付きもれなゝすと云ゝなゝ作れ
さゝふゝをさくゝをうゝ色させら作とゝくさられ
大ひう秀右こう　中しやう換とされとして名

うへくさまも此なくさみとまてはりものも
そとそれをんひろいたるまつぬりとうを
さう山のちくしをもこんくしやものさひてのりた
るやうのはかをさうたをみ光る八尝のつるり
もくしまを上人ちんこうやをみあしちり
一夏日　ひ田お将　清ちやをうさへて一ぬく
垂上中さくや
ちくり山川みかきりかちてなちくらまうり
いさ搭ちやうふかりけらんうしをやまをはり
とうり垂ゆくれまを山上へ次第くみあうと
中やゆのりわれを岩を垂ていたれ山まを
ちりをとすされを祈らひ今をけうるやうんは

を洗ものとうりれくりれ垂をあくりてれ出
たりはう垂くくを垂をはくの清たくを足やあく
とあうゆちたれくのてをけくし金張をちり
まあれかさ中うり中くはりのなりひく
をたやうたいたへかのををををひけく
れ沢弟うり山乃上やまのをくひうをうくやをを花
や垂くのいわをうのうひをういきやうくんを
用お変清ありひうりへいをの世まをくを上
以す家うをさひ中義きくのうりうり三月
十又日と日きり清ちやうなさくあのちいち
垂ををくん日まをあり上ふりけくををけく事も
なくひひうやうはをうりれくちうり人く

せうしをきりうひいてさすが其日は面々を風
ものを天地をたやうにうたをうたはせをうなぐめむと
うをくもをおこうをうしいの宗人間れまさまあう
ををのくうんしをまがまりみあくるはしりを天
氣がもれやうてあはしくやりはくまをるまを
はしはしをしあををとなる趣して浮められようく
はうまれゆをなさん張うこをられうる度を
はかやうれを理をまあてをんうい張めるい
をたうれ浮うやうかうるうるおいましくを面は
いくうう張をうまうはをあうはれをせた
をふをあ
まりうをはなくしををををまふゆへをりまう

ちやのをうををうひ風乃庭よををいふをくく
なりをんとうを公家武家京をうをいをを浮をり
物ひうらひ乃ちんゆ
れをうをれか茂乃菊酒くをんをうの江川をけ文
いうをあく我ものくはけはく金銀をはの
ををあかをわうゆるてをはくしうれ数ををう
をを上乃をのをつおいら張をくてをう
らの山をはひうををうす浮をうひ中て
中をはうをいをるのひをうん人をうをを三を
をるををちんをを浮ゆをんれを三ゆををまく
かをををゆく事ハを
二をん乃浮ちやを
彩しやうををいたをられ

は松枝いろくれ本なるへへうゐそこれあり家は
いとおそりれをたくへこひふれそ州をうれは
かいめうのてにさ海しくされき一ふくわ寿申し
さ候　三番め乃はちや屋　小川　たそ
られ候風口まそたいもとおさり忌さんのその被
うけふうつまうこれきあのちややまき長谷川宗仁
ほうけんうつり於ていはくふおろまん先まて
義しそ御調はちや一噂く進上申され候
四さんめ乃はちやや　まし四太郎射芸
まそまるくナ又町けりし夫俊のと申むろひれ
され候くほくえりはそさひれなされはこれまて申
花にれされくのあひさるまそめなつてはてん金

限候ちまし先さ川かうりみうきさくう色しく
さまされしくふうもの夢せんへしらへ参承申
候なく
五番めふそ法善ゆん　僧正
こ人乃はてん義承れ当まそはちやうらうさの御の
はは承分はしくをたて但るる
六番先まそ　たいところと大坂乃てたそ
そうれあくまて　まし四太米りんのせうちん
栂の小すくをとく於へは参んはけられ又あの
さいこうくまて出立をめしうゐれされひのうくう
やまさ川かうまとのしくさ海はふり候うゐてひ
ひしきはいろくさらいきやうかさり候そろつて四

方色々にしてくれまいなる法ありうる海中法
々に叮嚀に沢山やひ光じんじを法さうくれされ浮
うこなく、ものそはにおもをろくおかしいきはは
たゆ色んのゆうきやうなの光なをそうやうみを
ゝとしてくるもなく作法をられのうらいを縁
おしまて法をうたをひられまんこんうを
くれ作ゝす國家ふふううおさきわこのしを
さのへられのけるよそをひ三國ううくまを
四事ともみんうんしつのめかいるうて浮世
ありの叮嚀をすとあの光中を抜ありり
七歩の法ちや屋　こてん勘兵衛　たてをを扶これ
風つをとひのまへ一　ゆく上まさ抜く

八歩　法ちや屋

つをうを海くあまきのりまつへくらはそくまの
ゆこかの法しを法のまつりをををうりし法ゆを
をやうくうう男て法てうををよ多ゝ巳ようう
よ2ゝ色てをんをおくいれとうう白ひみんく
ゝしてをゝをうけられ家をおを色て業のふゆい海
は業のゆみをを四へ法へれを海やをもを
たてをを丈う里物まをひのやうたんをんちやくゝう
丈うちを広とはわくくををくゝををの人れ
きを海なりられまをしてりをを法くへはあうを
あれくいうまをひをくゝ業八ねりりう山う
れすをんのをを山業まれををふくりう

くらうちやうのんとうちうちうくを物をせひ人
れ物のーうひうく清ひ物ーしめーこの
吹くを四列山うとれ吹ちゆ滝のひ山発いよれ吹くゆ
三四やうくふしやうの法華ちりこのかの法物垂所
下こ法ちん流のやうて所みれくうくうかうこの
ら色をうさへうちらのれうとあうとなられは法ん
をきて一あるを見せたな紙うさ色てうとれるを
ひれうくくうをたやふうこふねてくうさ乃糸
わせのこひのふれうちるはけるを板京義法紙たう
ほん　し引合かとるりねことなーへをを又一
方ようやきりちせいらうあ山りりられの婆ウ
せこゆーうを人ちうを色ちるとれくくを法ちや法ら

まへ安一ゆく垂上こ海くうきりうつるもう
法くーーをこくを法りまりうちたんちやくふ
すーをれうこをこをうをろへうこくふかう法よ
たここの四やうへくんしこれまを京の山法法
を法ひらんうきしくれな井のいこをたくふし
をうこきて桜木ろ岩ゆ法なうくくと引をへ
十ちん法く品を法文ちることを金張ましてつ弟
られふをちられうてみえちうきは法きてくふ
きいれ心を上発れなら
　けんこいの法義句
　ちうをりーあくーふ法弟よ心すくふ
也是うち　みこつ丹をあーらへ発ゆく

へいのうちにうつくしき人まうけさせうせんとう
うしてのちはゆきたのたのもしくてまちやう
たいまつ一つも自然のけぶりにこゝ色あり
ゆくまも人きやうをかをかをかをかをいろく
扇くの風にのれもたるをこつゝいのひかりう
さ海まわ　中将海はらんして
中とかきけんなのもすこれよりくやかを
きうくれきれは方れたりうはまりそいれ
くなる低さをうりかはうしなれいのくとを
おひのしたれかはやうひなり
新こやう　形もころく赤なる沢貴や
中ねさ海まもはこれのんを浪子

百姓あをきをれかはうんくさ海よりを
小神社くあをきれ又城墓院
茶ばうして　うのさひかちろふまりして
新知ひとして　六面石　三ばう洗面糸ら
きをれく　回野三ケ村くんたるひら
小野ひく　うさとを村　以上これハ歯秋
もをよひしられ神さのはんやくそかうを
れはまり天氣ノさ初ひもなくまくやくん
きらんてうく

太田和泉守紀

安永十八年三月十三日
天正記第九終

110X
323
9